Sun 12

茨城県
東茨城郡
茨城町

Spring 2021

まちと
つながり





季　移りゆく　かすかな光風（こうふう）　茨を繞（めぐ）る

春夜　緩やかに瞬く　燈の耀（かがやき）　爾今（じこん）示す道途

地の末末　人の末末　縹渺（ひょうびょう）たるもの

次代の萌芽（ほうが）　拓き　地を照らす

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所：前田地区

茨城県
東茨城郡
茨城町

Sun 12

Spring 2021

Contents　目次

03 特集一 そのまちのこども
まちの子どもは どこにいる？

07 居場所のあり方
ココデにあつまる人たち

09 まちで暮らす人
まちを想う人

15 牛と人がみる未来
－酪農をささえる研究牧場－

17 連載　マチのケシキ

18 編集室から



Cover
撮影場所／長岡地区
“駆けあがる”
坂の上から「おーい」と声をかけると
子どもたちが一斉に坂を駆けあがってきました。
一人ひとりの楽しそうなその表情に
いつもと変わらない無邪気さがありました。

※取材に際し、一部マスクを外しての撮影をお願いしておりますが
新型コロナウイルス対策を十分に講じたうえで、取材に臨んでおります

特集

そのまちのこども

まちの子どもは、どこにいる？

構成＝石川聖太　文＝二川ナオミ
写真＝アラタケンジ／竹内慎

突然、世界中に広がった疫病は
私たちの日常にも大きな変化をもたらしました
不安と混乱の中でも
これまでと変わらない
笑顔を見つけることができました



にぎやかな書道教室

「古事記」、「水玉」、「テニス」、「春草」、「梅の香」、「百鳥歌う」…一軒の民家の奥に、各々のお手本とにらめっこしながら、書道を習う子どもたちの姿を見つけました。

小鶴地区にある飯塚冬華先生の書道教室には、毎週土曜日の午前中に十数名の小学生が集まります。練習する文字のお題は月替わりで、硬筆と毛筆を練習しています。

「ねえ、ゆらさないで！」

開始から一時間が過ぎたころ、教室が少しざわざわしてきました。粘り強く自分の課題と向き合う子もいれば、添削をもらって一区切りした子、友達と小声で話す子、早々に筆を片付け元気よく外へ飛び出し、庭で友達と鬼ごっこをする子もいました。緊張と集中から解かれた子どもたちは、お迎えまでのつかの間を思い思いに過ごし、「先生さようなら～」とひとり、またひとりと帰っていきます。

純粋でいつも元気に

「子どもたちを見ていると、みんなマスクをすることや手の消毒が当たり前にはなりましたが、根本的なところは以前となにも変わっていないように感じます。みんな本当に純粋。自己流に固まっていないので、いろいろなことをスポンジのように吸収していきます。教室を始めて一七年が経ちますが、今でも綺麗な毛筆で書かれた教え子からの年賀状が届きます。機会は多くないかもしれませんが、大人になってもいざというときに綺麗に書けることは役に立ちますし、自信につながります。子どもたちには少しでも多くの自信をもってもらえればいいなと思っています」と飯塚先生は話してくれました。

半紙に筆をおろす子どもたちの表情は真剣そのもの。筆を置くと友達とワイワイしながら楽しそうに話しています。





























練習に取り組む渡辺さん（写真右上）。レンズを向けると「こんにちは〜!」と元気のよい挨拶やピースサインを出したりと、中学生らしい元気な姿が見られました。

限られた中でもできることを頑張る

ある日の夕方、学校の校庭で部活動をする中学生たちの姿を見つけました。お話を伺ったのは、明光中学校の二年陸上部の渡辺華帆さんと顧問の山口裕香先生。渡辺さんは小学生から陸上競技を始め、中学一年生のときには走り幅跳びで関東大会に出場しました。

明光中学校はクラスメイト同士、みんなで対話しながら勉強するコの字型学習（＊）に力を入れていたのですが、社会的距離が求められる今は難しいそうです。全校集会も各教室をリモートで繋ぎ画面上で行い、分散登校（クラスの生徒の半数が登校、半数は自宅学習）をしていたときにはオンライン授業もありました。部活動も例外なく、制限を受けたそうです。

「土日の部活がなくなったり、平日が時短になったり、一年生のころと比べて部活動の時間はかなり減りました。ペアを組む練習ができない代わりに、人と距離を空けてできる練習内容が多くなりました。マスクをつけて練習するので内側が熱くなってしまい大変なんです（笑）。以前は二週間に一回記録会があったのですが、それもなかなかできずにいます。気持ちのバランスを取るのが難しくて落ち込むこともありますが、家でストレッチや縄跳びをして、後悔のないように毎日試行錯誤しています。（渡辺さん）」

「生徒たちを一年間見守っていましたが、今までの〝当たり前〟がとてもありがたいことだったのだと感じています。大会や記録会でも以前のように近くで声援を送ることはできないのですが、場内のアナウンスで生徒の名前と順位が呼ばれると、とても嬉しくなります。この状況がいつまで続くかわかりませんが、少しでも生徒たちが活躍できる場をつくれたらいいなと思います。（山口先生）」

＊：教師から見て「コ」のような形に座席を配置し行う授業。生徒主体の能動的な学習ができ、対話の重複・交差が可能

「実際に会えない間はSNSでつながっていました」と生徒たち。卒業後もさまざまな形でつながっていくことでしょう。

不安だからこそ将来に希望を持ち進んでいく

春の気配が漂う放課後の校舎。白衣を着た先生が階段の手すりを消毒しています。卒業を一週間後に控えた茨城県立茨城東高校の三年生たちと、学年主任の寺内芳江先生にお話を伺いました。

この日は年間を通して行う長期就業体験の発表会。一年間を通し、自分が選んだ企業や介護施設、保育園などに定期的に足を運び、就業体験をしたそうです。二〇二〇年度は感染拡大防止の影響で、予定の半分しか行けなかった体験先もあったのだとか。そんな状況の中でも、一人ひとり自分の進学先、あるいは就職先と関連した分野を選択し、自分なりの将来像を具体的に考えてきたことが生徒たちの話から伝わってきました。「進路選択に悩む中での休校や分散登校、受験勉強は心細く、本当に不安でした。そんな中でも先生たちは親身になってくれてたくさん相談にも乗ってくれました。本当に感謝しかありません。」

「今年の三年生は社会が大きく変化し、制約が多い中、久しぶりに学校で会ったときには『先生は元気でしたか？』などと、こちらを心配してくれる子が多かったように思います。周りを大切にできる人はきっと周りからも大切にされる人間であるかと思います。ぜひこれからもそうあってほしいと思います。」と寺内先生は話します。

子どもを卒業し、大人として社会へ出ていく生徒たちを、期待と心配が入り混じった目で見つめる先生の表情がありました。

「私たちがいつも全力を尽くすことができるのは、先生や支えてくれる家族があるからだと思います。いつも見守ってくれてありがとうございます。（渡辺さん）」

居場所のあり方

ココデにあつまる人たち

写真＝竹内慎一　文＝二川オオミ

茨城町には「Koco・de」（以下ココデ）というコミュニティスペースがあるのはご存知でしょうか？地域おこし協力隊の一期生が二〇一六年にオープンさせた当初は、小学生から高校生が対象の学習支援施設でしたが、その後を引き継いだ二期生の近藤弘志さんによって地域住民が「自由に学び、交流する」空間へと少しずつ変化を遂げてきました。まもなく協力隊三年の期間満了を迎える近藤さんの後任は二〇二〇年に三期生として大阪府から移住してきた尾崎知弥さん。ココデの活動を通して見えてきた地域の子どもたちと大人たちの関係性、新型コロナウイルスの影響、そしてココデの「これから」についてお二人にお話を伺いました。

子どもも大人もみんなの居場所に

近藤さん　自身の経験からも大人と交流することは、子どもが将来を考えるときの指標の一つになると感じています。ココデを運営するようになってからは地域の誰もが利用できる空間づくりを目指してきました。町内の子に限らないとは思いますが、今の子どもたちは家族以外の大人と交流する機会が少ないように思います。二〇一九年一二月のクリスマス会では、近所の方が子どもたちのために飾りを準備したり、そば打ちを一緒にやってくれるなど、とてもいい関係が生まれ活動に手応えを感じ始めていました。しかしその後、コロナの流行に伴い、なかなか思うような活動ができずにいます。

ココデでは勉強をするのも遊ぶのもぼーっとするのも自由です。「好きに過ごしていいよ」と言うと戸惑う子が多いので、自分も積極的にいろいろなことに挑戦するようにしています。「それ本当にできるの？」「わかんない！でも、できそうだからやってみる！」と失敗しても許される雰囲気というか、あえて失敗を見せるようにしています。成功とか失敗とか、周りの評価に捉われず自由な発想で挑戦できる場所にしたいですね。コロナ禍の今は難しいかもしれませんが、子どもだけでなく、地域の人々が気軽に集まれるみんなの居場所、ないと困る！という空間になってほしいと思います。

尾崎さん　僕は高校生のときに地元のＮＰＯが主宰する若者支援のコミュニティスペースを利用していました。三年生のときにはボランティアの大学生と一緒にイベントの企画にも携わるようになり、褒めてもらったり、役立てたと思えた経験がとても嬉しくて思い出に残っています。子どもたちには自分を認めてくれる大人の存在や居場所が必要だと思い、ココデの運営に興味を持ちましたが、今はまだどことなく大人側が利用したり関わることを遠慮している雰囲気があると感じているので、まずはそれを変えたいと考えています。子どもたちと大人がほどよい距離感で関われる場所にしたいと思います。

今回取材を通して見えてきたのは、環境の変化に対する子どもたちの柔軟な対応力と、いつの世もきっと変わらないであろう純粋で明るい笑顔、そして彼らを身近で支える大人たちの想いでした。まちの子どもたちのあり方を見つめ、関わり方を考えることは、今の世相を切り開き、未来を明るく照らすための何か大切なヒントになるのではないでしょうか。







写真左：近藤弘志さん　右：尾崎知弥さん

Koco・de
茨城町小鶴168　029-291-8802
facebook.com/townibaraki/

まちで暮らす人 まちを想う人

Feeling × Thinking

写真＝アラタケンジ　文＝二川ナオミ

創ることの価値を求めて

まちで暮らす人
家具デザイナー　杉浦知志

杉浦さんは一九八五年茨城町長岡地区生まれ。茨城県立水戸第一高等学校卒業後、多摩美術大学（以下多摩美）へ進学しプロダクトデザインを学ぶ。卒業後はシチズン時計株式会社にて国内外向けの製品デザインや海外宣伝部を経験。二〇二〇年茨城町に戻り、現在は水戸市の八木沢木工にて家具デザイナーとして活躍しています。

考え、好きな道へ進む

子どものころは書道、水泳、エレクトーンにそろばんなど、たくさん習いごとをしていました。そろばん教室は「こどもや」の近くにあり、教室が終わると友達と駄菓子を買ったりゲームをしたり。習いごとの空き時間には近所の田んぼで遊んだりと、自然の中で遊ぶことも多かったと思います。中学では弓道部に所属しました。弓道は的に矢が当たるかだけでなく、所作を磨くことも大切で、動く文化部（笑）とも言われていたので、勉強にも集中することができました。高校に入ると、同級生は皆優秀で勉強についていくだけで精一杯。そんな中、目的もなく進学することに疑問を感じ、これから何をすべきか考えるようになりました。子どものころからゲームが好きだったので、コンピューターグラフィックスを専門とする学部への進学を考えましたが、数学が苦手で断念したり、友達の影響で法学部を志してみたり…いろいろと迷っていました（笑）。そんな中、文化祭で大道具制作の経験をしたことで美大への進学を考え始め、偶然訪れたギャラリーで美術予備校のオーナーと出会ったことで、美術予備校へ通い始めました。

ものをなめるように見る

多摩美へは一浪して入学しました。予備校のオーナーからはグラフィックデザインを学ぶことを勧められましたが、平面より立体のデザインを学びたいと思い、プロダクトデザイン（＊）を専攻しました。多摩美は自由度の高い大学で、授業のお題が非常にシンプル。その分、自分でアプローチを考え形にする必要があったので、入学して右も左もわからない自分としては最初からハードコース。これが美大なんだな、と洗礼を受けた記憶があります。大学時代はとにかく「ものをなめるように見る」ことを叩き込まれました。立体物がどんな構造になっているか、デザインされたことによってどう美しく見えるのか。そんなことを常に考えながらデザインの奥深さにはまっていきました。

プロダクトデザイナーとして働く

就職活動を始めたころは、家電製品のプロダクトデザインを希望していたのですが、人が身につけるもの、より人に近いプロダクトデザインも面白そうだと思うようになり、シチズン時計株式会社に就職しました。時計デザインの基礎的な知識を身につける研修期間を経て、初めに配属されたのは主に中国向けのＯＥＭ製品をデザインする部署。様々なバリエーションのデザインを手掛ける中、入社して三年目くらいまでは丸いものを見るとなんでも時計に見えてしまう状態でした（笑）。

次に配属されたのはレディース製品の部署で、男性は私だけの職場環境でした。女性の感性を理解するために、色や流行を特に意識して日々アンテナを張っていました。その部署を三年担当し、再び異動となったのですが、次はプロダクトデザインではなく海外宣伝部に配属。自分がデザインするという





＊：プロダクト（生産品）をデザインする仕事。家電や雑貨、機械部品などでデザインの対象は多種多様

よりも、宣伝の方向性を広告代理店などの協力会社と折衝し、細かく調整をするなど、プロデューサーのような仕事をしていました。これまでの業務と違い、とにかく忙しくて大変でした。その後再びデザイン部へ戻り、若年層をターゲットとした国内向け製品のデザイン業務に携わりました。

地方とデザインの関わり

仕事を始めて数年したころから「地元を盛り上げたい！」という気持ちが心の中にあったので、将来は茨城に戻ることを漠然と考えていました。そのこともあり、都内で開かれる茨城関係のイベントにはよく参加をしていました。そこで地域おこし協力隊の方との出会いがあったり、県職員の方々との関わりが生まれたりと、自分なりに茨城との関わりを持ってきました。

昨年、仕事が一区切りしたタイミングで休暇をもらい帰省していたのですが、コロナ禍が重なり、都内で仕事をするということが重要ではなくなっていった時流を機に、茨城で働こうと心に決め、会社を辞めて地元に戻りました。

求職中、茨城にはプロダクトデザインの仕事が全くないことに驚きました。設計というキーワードで問い合わせをしても、仕様に基づいた設計ができる人を探していると言われ、よりデザイン性を重視する会社に巡り合うことはほとんどありませんでした。その中でご縁があり、これまでの経験が活かせる八木沢木工という老舗の家具店に就職することができました。入社してまだ日が浅いのですが、ヒノキを使った小物をデザインしたり、自社のウェブサイトのリニューアルを担当したりと、クリエイティブが形になる職場だと感じています。

幸運にもプロダクトデザインに携われる企業に就職できましたが、地方はまだまだデザインやクリエイティブの重要性や価値に気づいていないと感じます。将来的には、地方の人々や企業にデザインが持つ価値を知ってもらい、さまざまな仕組みや考え方を創っていきたい、と思っています。







株式会社家具の八木沢
茨城県水戸市五軒町3-3-66　0120-900-177
yagisawamokko.jp



予防と地域医療

まちを想う人

歯科医師　矢部亨

矢部さんは一九八八年茨城町若宮地区生まれ。奥羽大学歯学部を卒業後、都内の歯科医院への勤務を経て、地方における医療のあり方を学ぶために富山県へ。二〇二〇年に帰郷し、七月に大戸地区にて「水戸ライフ歯科クリニック」を開業しました。

歯科医師を志すきっかけ

子どものころは、近所の川や涸沼で釣りをしたり、野球をしたりと外で遊ぶ方が好きでした。一方で、絵を描いたり、細かく手を動かす作業も好きだったので、将来は芸術家になりたいと思っていました。

私が歯科医師を志すようになったのは、尊敬する祖父の影響があります。祖父は地域の保健所に所属する獣医師で、八十歳までその仕事を続けた人です。祖父をはじめ獣医師の多い家系だったことから、高校の進路選択の時期には漠然と自分も獣医師になろうと考えるようになっていました。しかし、そのことを祖父に話したところ「動物ではなく人の健康に携わる仕事に就いて欲しい」と言われました。若いころから入れ歯を使用していた祖父が、楽しみなはずの食事に苦労する姿を見ていたこともあり、歯科医師という仕事なら祖父のような歯で困っている人をサポートすることができるし、細かい作業が好きな自分には向いているのではないかと思い、獣医師ではなく歯科医師の道を進むことにしました。

予防歯科との出会い

私が開業した「水戸ライフ歯科クリニック」は〝予防歯科〟に特化した歯科医院です。予防歯科は虫歯や歯周病の治療に加え、日頃の定期的なメインテナンスを通じ、患者さまのリスクをコントロールし、歯を失うリスクを軽減することで、生涯を通じてご自身の歯で過ごせるサポートをする予防型の歯科治療です。



地元の茨城で予防歯科を開業するヒントを学ぶため、二〇一七年に富山県砺波市にある「となみ野歯科診療所」へ移りました。そこは一見すると診療所と気づかない佇まいで、看板すら掲げていないのですが、予防とメインテナンスに力を入れた診療が口コミで評判になり、長いときで予約が半年待ちにもなります。

砺波市は歯科医療に力を入れており、例えば地域でフッ素うがい（＊）を取り入れ、十二歳児の八割は虫歯ゼロという実績があります。茨城県にはマル福という制度がありますが、砺波市では中学三年生までは医療費の助成があり、定期的に歯のメインテナンスに足を運びやすい環境があります。また、東京などの都市部と比べると人の流出入が少ないため、長期にわたり患者さまとお付き合いすることができます。その中で、患者さまごとの病気のリスクに加え、生活環境や身体の変化にも合わせたメインテナンスが、口腔内の長期的な健康維持につながるということを学び、地方の医療モデルとして非常に参考になりました。

予防歯科を根付かせたい

茨城町ではまだまだ予防歯科に対する理解が少ないので、来ていただいた患者さまには予防とは何かを説明する日々です。口の中を撮影した写真を見せながら、現状はどのような状態なのかを説明し、患者さま自身にトラブルの原因やこれからのケアについて一緒に考えてもらい、その人に合った治療を行います。今はまだ、予防歯科への理解を広めているところなので、結果が出るのはまだまだ先になりそうです。

茨城県は十二歳児の虫歯の本数が全国平均よりも多いことをご存知でしょうか？地域の医療体制や人々の意識が変われば、虫歯や歯周病で歯を失う人を減らすことにつながります。人生一〇〇年時代と言われる昨今、健康な口腔環境の大切さを知っていただき、一人ひとりが一本でも多くの歯を残すことで、豊かな人生を送れるサポートができればと思います。





大学では六年間歯科医療の基礎を学びましたが、そのころはドラマで見るような「名医」に憧れていました。高い技術や専門性、いわば職人のような歯科医になりたいと思っていました（笑）。そんな私が本格的に予防歯科を意識したのは大学を卒業し、研修を経てからのことでした。

二〇一三年から勤め始めた都内の「アップルデンタルセンター」（以下ＡＤＣ）は、一般歯科だけでなく各分野の専門医と連携することで、高水準の医療を提供する歯科医院でした。院長の畑先生はメディアから取材を受けるほど予防歯科に対する想いが強い方です。私がＡＤＣで勤務を始めたころは、ちょうど医院としても過渡期だったのだと思います。開業から多数の治療実績を積み重ねる一方、治療をしても一定数の患者さまが虫歯を再発することから、健康な状態を維持できる口腔環境の提供を目指す〝予防歯科診療〟へ力を入れ始めたころでした。また、予防先進国であるスウェーデンの歯科医療を実際に体験して学んだことで、予防歯科の重要性を多くの人に知ってもらいたいと思うようになりました。

富山の地域医療体制

働き始めた当初、今後開業する際は東京で、と考えていましたが、元々地元が好きでしたし、地元を離れ改めて地方のよさにも気づき、いずれは茨城に戻ることも考えるようになりました。

＊：低濃度のフッ化ナトリウム溶液を口に含んでうがいすること

水戸ライフ歯科クリニック
茨城町大戸3425-13　029-246-6868
mito-life-dc.com

牛と人がみる未来

－酪農をささえる研究牧場－

写真_竹内慎／文_平沢美晴

朝の食卓に並ぶ、トーストにのったバターと一杯の牛乳。暮らしに欠かせない乳製品の安全を支える場所が町内にあります。明治飼糧さんの研究牧場には、研究施設らしい無駄のない整然としたイメージはなく、牛の鳴き声が聞こえるようなのんびりした空気が流れています。

牛と人の距離

明治飼糧株式会社 水戸研究牧場は、平成一六年から若宮地区で牛専用配合飼料の研究開発をしています。「ここは元々牧場のみの施設で、研究施設は離れた場所にありましたが、こちらに移ったことで、牛たちの様子を実際に目で見ながら研究ができるようになりました」と課長の増子孝則さんは話します。現在、ホルスタイン種の子牛を中心に、牛たちが元気に育つエサの研究をしています。また、研究所の敷地には関連会社が管理する肉用牛もいます。おいしい肉に関する研究も行い、町の酪農・畜産に貢献することも、研究スタッフのモチベーションに繋がっているそうです。

エサから健康を考える

牛のエサは大きく〝粗飼料（乾燥させた牧草やデントコーンなどを乳酸発酵させたサイレージ（*1））〟と〝濃厚飼料（とうもろこし・大豆・大麦などの穀物を加工したもの）〟に分かれます。人間の食事に例えると、粗飼料は野菜、濃厚飼料は肉や魚にあたり、二つをバランスよく与えることが牛の健康には大切です。





牛などの反芻（はんすう）動物には胃袋が四つあり、第一胃から第四胃に分かれています。その中でも、ルーメンと呼ばれる第一胃の中には、繊維質を分解する酵素を持つ微生物や細菌が多く生息し、消化しにくい粗飼料を栄養として体に吸収する働きをしています。

粗飼料では得られない栄養を濃厚飼料で与えますが、とうもろこしや大豆などの濃厚飼料も加工の程度や割合によって、生乳や肉の生産効率を左右してしまいます。また、単に栄養のことだけが課題ではないようです。「牛はグルメです。人間の子どもなら言い聞かせることもできますが、どんなに栄養がよいものでも牛は美味しくないと食べてくれません」と増子さんが笑いながら教えてくれました。

研究牧場内の粗飼料分析センターには、全国各地の酪農家さんから検査依頼の牧草やサイレージが届きます。地元産の飼料イネについても栄養分析を行っており、分析結果を酪農家さんへ素早くフィードバック。スピード感を大切にしているのは、牛の健康は飼料の中身が少し違うだけでも変化しやすく、そのわずかな違いにも素早く対応できるようにするためです。目では見えない科学的なファクトを酪農家さんが重要視していることが伺えます。

これからの酪農

〝スマート畜産〟という言葉を耳にする機会も増え、酪農のあり方も従来とは変わってきたようです。牧場の仕事の省力化・効率化を目指し、酪農家さんから求められることはますます多様化しています。また、環境への配慮として、SDGs（*2）への取り組みも明治グループ全体で積極的に実践しています。

研究牧場では、明治グループのヨーグルト技術を応用した飼料「プレビオサポート」を開発。子牛の腸内環境を改善する機能性飼料を生み出すことに成功しています。また、醤油粕（ざんさ）などの食品残渣を利用し環境に配慮した飼料（エコフィード）づくりを進めてきました。さらに、牛が食べたときに出すゲップに含まれるメタンガスを減少させる研究にも取りかかりました。

牛たちの健康は、私たちの健康とつながっています。乳製品の安定した品質は、ここで日々研究に取り組む人と牛たちがいるからこそ成り立っています。穏やかな雰囲気の中、これからも人と牛の研究は続いていくことでしょう。

*1：青刈りした牧草をサイロなどで発酵させたもの
*2：Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称

明治飼糧株式会社 水戸研究牧場　茨城町若宮870
meijifeed.co.jp

連載

マチのケシキ

第12回　Vが告げる季節の移り

絵｜やまなかももこ　文｜石川聖太

二月の夕暮れ時。陽が伸び始めたオレンジ色の空を眺めると、遠くから大きなV字が頭上を越え、夜の帳に合わせるように暗闇へ飛んでいきました。越冬のために渡って来たハクチョウの群れです。以前は町内でその姿を見なかったのですが、ここ数年町の空を飛んでいくようになりました。

年が明けたころから、町内の休耕地で餌をついばむハクチョウの群れを見かけるようになります。飛来する数は年によって違うそうで、二〇〇羽を超える年もあれば、五〇羽に満たない年もあるそうです。

二月中旬になると、それまで家族単位で過ごしていたハクチョウたちが日に日に集まり、群れで過ごすようになります。その後三月中旬ごろにかけ、北へ渡る北帰行（ほっきこう）が始まります。天敵の少ない早朝や夜間、空にぐるりと輪を描いてそのまま北の空へ飛んでいき、その後北海道などで羽を休めながら、夏を過ごすシベリアへと帰っていきます。また寒くなるころ、ハクチョウたちはV字に広がり、私たちの頭上で一鳴きしながら飛んで来ることでしょう。行事が軒並み中止となる中、日々の些細な出来事で季節の移りを感じられるのは、実はとても豊かなことなのかもしれません。



世相に翻弄される私たちを大空からのぞいて鳴いているその姿は
私たちへ何か思うことを伝えているように映ります。

絵:やまなかももこ

画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」（くもん出版）、
「俵万智3・11短歌集 あれから」（今人舎）など。

momokomo.net



いば3「の」プロジェクト
着々と進行中!!!

いば3の“次の一手”としてスタートした
茨城町の新しいおみやげをつくる「の」プロジェクト。
涸沼ハーブの里さんの無農薬ハーブを使った
オリジナルブレンドハーブティーをおみやげにするため
プロジェクトメンバーが日々開発を進めています。
2021年の初夏には
正式なおみやげとしてリリース予定です。
どうぞお楽しみに!!!

From Sun –編集室から–

Sun 第12号をお届けします。

私も子どものころに書道を習っていましたので、写真を見て懐かしい気持ちになりました。集中できなくて，おしゃべりしていたのも同じで、先生には迷惑を掛けましたが学校以外で友達と話せるあの場が大好きでした（笑）。[ひで③]／母さん、僕のあの切手どうしたでせうね。ええ、小学校のころ、集めていた切手ですよ…[KABA3]／子どもたちの笑顔が印象に残る取材・撮影となりました。大人に見守られながらいきいきと育った子どもが大人になり、未来を切り拓いていく姿を想像します。[内3]／つい先日、昔遊んでいた公園に久々に行ってみたら、空き地が様変わりしてしまっていました。成長につれ感じる景色もどんどん変わってきてしまいますが、だからこそ小さなころの思い出を大事にしていきたいです。[がっきー3]／今回の特集、いかがでしたか。取材を進める中で、子どもたちの楽しそうな顔を何度も見かけるうちに、自分の子ども時代をどうしても思い出さざるを得なかった。元子どもとして、子どもたちに言いたくなる。きみたちの未来、これからもっともっとおもしろいことばかりだぞと。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

次号は、2021年7月発行予定です。

Sun　第12号　春号　2021年3月15日発行

企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
［茨城町　町長公室 秘書広聴課］
〒311-3192　茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL：029-240-7148　MAIL：iba3@town.ibaraki.lg.jp

編集・アートディレクション・デザイン｜i,D
取材・出筆｜二川ナオミ　平沢美晴　石川聖太
写真｜アラタケンジ　竹内慎　絵｜やまなかももこ
印刷・製本｜株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。　©Sun all rights reserved.

Special Thanks［順不同］
鴻巣千春さん　飯塚冬華さん　茨城町立明光中学校
茨城県立茨城東高等学校



“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から5年目を迎え、
会員数は890名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト



Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です

Sun 第十二号 二〇二一年三月十五日発行 企画・発行 いばさふるさとサポーターズクラブ事務局 iba3@town.ibaraki.lg.jp TEL 029-240-7148